



令和4年5月16日発行
熊本県立湧心館高等学校

「熊本地震から学ぶ防災への備え」

6年前の4月14日午後9時26分、みなさんは何をしていましたか？日本史の授業の中で、「社会に大きな影響を与えた出来事」を生徒のみなさんに答えてもらったところ、「熊本地震」を挙げる人がたくさんいました。経験したことのない強烈な揺れ、建物倒壊などによる街の変貌（へんぼう）、



打ち続く余震、物資の不足、学校の休校。何よりも「当たり前生活」ができない不自由さから、将来に対する不安を、皆一様に感じました。あれから6年が経ち、徐々に「あの時」の思いを忘れつつありますが、あらためて当時の記録映像などを観ると、「あの時」を思い出し、心がざわざわして不安になります。一方で、全国から集まった救援物資やボランティアの方々の事に触れ、人と人のつながりや、助け合いの大切さを挙げた生徒もいました。私たち県民は「熊本地震」から多くのことを学びました。4つのプレートがぶつかる日本の国土は、世界でもまれに見る地震多発地です。また、モンスーン（季節風）が吹き付ける日本は、四季折々の美しさで私たちを楽しませると同時に、太平洋を渡る季節風が大雨や大風をもたらす災害大国でもあります。私たちの祖先は、大災害と隣り合わせに逞しく生き抜いて来ました。この通信を通じて、様々な災害の中で身を守り、生きていくことについて一緒に考えていきましょう。

熊本地震での教訓とは何か

① 常に心の備えを

震度7の熊本地震が発生した地域には布田川断層があり、「大地震が起きる可能性がある地域」とされていました。政府の地震調査委員会は今後30年以内に大地震が発生する確率は0~0.9%としましたが、差し迫って大地震が起きると考えた人は少なかったと思います。しかも震度7の大地震が2度おきると予測した人はいなかったでしょう。ちなみに、近年で震度7の大地震が起きたのは6度です（阪神淡路大震災、新潟中越地震、東日本大震災、北海道胆振東部地震、それに熊本地震の2度）。地震国日本では、「いつどこで起きてもおかしくない」という意識を常に持つことが大切です。

避難経路は…
家族の集合場所は…



② 常に物資の備えを

大きな災害が起きると生活に必要な物資が不足します。電気、ガス、水道、通信、道路など生活に必要な設備が寸断され、利用できなくなります。熊本地震を経験した私たちにはしっかりと刻み込まれた経験です。国が示したマニュアルでは、「1週間の生活物資の備蓄をすることが、災害の備えとして望ましい」とされています。それぞれの生活を点検し、可能な限り非常用の備蓄をすることが大切です。



③ 助け合いの大切さ



西原村は布田川断層の上に位置しながら、人的被害を小さく抑えることができたことから「奇跡の村」と呼ばれています。これは偶然でなく、次のことが考えられます。まず、住民が活断層の上にあるというリスクを認識し、「いつか必ず地震が来る」という考えから毎年住民全員参加で発災対応型の防災訓練を行ってきたことで、住民の意識が震災を「想定内」にしておいたことが挙げられます。二番目に被災後の避難所運営が、住民の自助・共助でスムーズに行われたことです。避難所には様々な職業の人がいますが、消防団が事前に作成した世帯リストをもとに、住人の得意分野を生かす避難所運営にスムーズに移れたそうです。公的な支援が本格的に始まるまで、いかに生き残って行くかは**住民の自助・共助が大切**です。普段からの地域の連携が重要で、「ご近所の底力」が試されるところです。

緊急地震速報システムについて

熊本地震を経験し、本校には平成29年度に緊急地震速報システムが設置されました。これは機械が地震を感知すると、敷地内に緊急地震速報が流れます。この放送が流れたら、机の下に潜り頭部を保護する、揺れが収まったら安全な方法で避難する、などの適切な行動が取れるようにしましょう。まずは『自分の身は自分で守る（自助）』です。避難経路は教室に掲示してありますので、常に意識して覚えておきましょう。



天災は忘れた頃にやってくる

これは旧制第五高等学校（現、熊本大学）で学んだ物理学者、随筆家の寺田寅彦の言葉とされます。今、私たちの生活を脅かしている新型コロナウイルスの流行は自然災害ではありませんが、私たちの「当たり前の生活」を根底から突き崩す、という点では同様です。だれでも自分が不幸な目にあることは考えたくないのが本音で、「そんなことは起こらないだろう」と思います。多少臆病でも、何事も常に意識し、**冷静に備えておくことが大切です。**

【文責 通信制防災担当】